

方向

第七〇号 一九八七年七月二五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

慧 晃 律 師 (一) 赤 谷 明 海

はじめに これは赤谷明海氏の龍谷大学研究科第一期報告論文である。成立前後の事情を、氏の自伝といふべき『平安学園と私』に次のようにいう。

〔昭和〕一七年四月に竜大研究科に入ったものの、…週一日登校ぐらいの単位の選び方だったと思うが、その一日すら出ることは稀であった。八月の末、松浦へ一嶺君から速達で研究科学部共に授業は終り、九月三日から試験だと知らせてきた。その日から私は東京での文部省主催の錬成会に参加しなければならぬ。私は研究科をやめる積りだった。続いて東森へ善城君からの速達には深浦正文の試験は論題自由のレポートだとあった。もし研究科へ戻る時があれば深浦先生の単位だけでもとっておかねばと思ひ直し、一日で書き上げたのが次のものらしい題である。「南都唐招提寺戒学院所蔵の成唯識論各種刊本を紹介し兼ねて同論刊行の歴史に及ぶ」(草稿一〇枚・逸)；その後十一月に入り、学校から「単位論文を提出しないと卒業が一年遅れる」といつてきた。一〇日に学校へ出頭すると「二〇日まで待ってやるから是非出せ」とのこと。一〇日間しかない。いよいよ退学する積りで、一二日に登校し、三根脩一(当時図書館職員)に伝えたら反対され、桐溪(順忍)先生からは叱られた。たまたま出会った松浦君からもすかさずされて、また気が変わってしまった。その足で谷大図書館へ行つて

関係書を調べ、その晩から資料整理、翌日から執筆して一六日脱稿した。これが「慧晃律師」(四六枚)である。慧晃は江戸中期の学僧、法金剛院の前住だったので予科時代の聖教整理以来惹かれるところがあった。しかし望月へ信亨氏『仏教大辞典』をはじめ、どの辞書にも「郷貫詳ならず」「一生の行実未詳」などとしか出ていない。泉涌寺に出世して紫衣の編旨を受け、唐招提寺の長老もしているのに未詳とはけしからん。是非この人の業績を世に伝えねばと期するところがあって、資料は早くから集めていた。ただへ北川智海へ長老から妙心寺春光院に關係書があると聞きながら調べていないし、泉涌寺へも行っていないのが心残りだったが、仕方がない。手持ちの材料だけで書あげた。それだけでも末尾に附した著作現存目録には二〇部五九巻を数えることができた。一九日に清書を終え、期限日に当る翌朝、薬師寺の高田好胤(当時龍大予科生)に托して提出した。

戦後二六年五月、ふと望月氏『仏教大辞典』の覆刻本(一九九一年刊・宝蔵館)を見ていて、慧晃の伝が改められているのを発見した。そして戦前、『宝雲』の森さんから、新村出が私の論文を見たという話のあったのを思い出した。新村先生からどんな経路で伝わったのかは知らないが、私がかつて仏教学界のお役に立てたことといえただだこのことだけである。なお、小島文保(通正)が龍大図書館司書をして三一年、この論文を製本して私に戻してくれた。…前記の論文で二期生にはなったのだろうか、その後学校へはさっぱり出ていない。そして二期生の報告論文も出さないうちに召集の日を迎えることになる。……

文中の小島氏は後に龍谷大学教授となり『法華経』文献学で知られるが、さきごろ逝去した。(原田憲雄)

目次

小序	
略伝	
学究	因明 俱舍 円寛 起信 六物 三論 楞嚴 梵学 華嚴 密学 禅学 戒学 其他
寺務	法金剛院 泉涌寺 唐招提寺
文雅	
後語	

小序

日本仏教学史を概観する時、徳川時代は確かに鎌倉時代と共に教学復興の時期であると言ひ得る。勿論その固定化の傾向、考証学的な緻細性等は、鎌倉時代の剛果にして奔放なる学風に比すべくもないが、諸学復興の機運は仏教界にも幾多の学僧を輩出せしめ、各宗に於ける講学研究の盛んなる事、決して鎌倉時代に劣るものではない。而して徳川時代教学の隆盛は元禄享保の交を以て頂点とする。従つて此の頃の学僧にして各宗の叢伝の上にその名を留めてゐる者は夥しい。然し又反面学識と業績に於いて優に後世への啓蒙たるべき人物にして僧伝にその行実を没してゐる者も少なくないであらう。我が慧異律師の上にその例証を見るのである。律師は泉涌寺並に唐招提寺系の律苑を通じ、徳川期第一流の学匠と見なして差支へないであらう。然るに律師にはその正伝とも言ふ

べきものがなく、僅かに現代二三の辞典中に不備な数語を献ぜられてゐるに過ぎない。今茲に『日本仏家人名辞書』中の全文を引出してみる。

一 慧晃（二三三四）：山城双岡某庵の学僧なり、慧晃は郷貫詳ならず、出家して南北の講席に列し、性相顯密の学に該通し、殊に悉曇に達し、因明に精し、貞亨元年三十三過本作法纂解三卷を作り、南都興福寺知足坊清慶に示す、清慶激賞して序を作る、後根橋易土集廿六卷同附卷四卷を作る。これ諸経論に散見せる梵語を類聚して解釈を附したるものにして博覽強記驚くべし、一生の行実未だ詳かならず（註）鷲尾順敬氏編『日本仏家人名辞書』四十三頁。

これは書肆に流布してゐる『纂解』の序文に、慈雲尊者の『梵学津梁』に編輯されてゐる『易土集』を参照して作成した伝であり、仏教大学並に望月氏編纂の大辞典も殆ど之と異るところがなく（註）、甚しきは仁和寺の住僧と誤伝してゐるものさへある。

（註）仏教大学編『仏教大辞典』三四九頁下、望月信亨氏編『仏教大辞典』二七一頁下参照。

事単に伝記に関するものではあるが、嘗て能清院義澄が『律苑僧宝伝』を読み、

「尤難戒門一同。我祖門古徳且少。適難有数伝。其伝来行業未詳。是皆非作者之過。不我門故。未親近也。」として『招提千載伝記』九卷を撰した如く、自門古徳の行実を伝へる事は末徒の責務であり、資料の關係上それを他門に期待する事は出来ない。まして平素敬愛する先師の事に関しては、単に伝記の事として放置し得ない心情の余蘊がある。これこの小文をもつる所以である。ただこの文の願ふところは慧晃律師の業績の紹介であつ

て、その思想信仰の解明は他日の研究に譲り、目下の問題として取上げるところではない。

略 伝

律師、諱は慧晃、号を玉昌と言ひ、照山と称し、出家の当初は惠量と名づけられ、又翳革の雅号を有つてゐる。洛西花園天安寺法金剛院の住僧である。父は浜岡道泉、法号を無塵道泉法橋と言ひ、寛文七年（1667）に歿してゐる。恐らくは相当上流との交際を保ち、経済も貧しい方ではなかつたであらう。母の氏姓は明らかでないが、雲山寿慶比丘尼の戒名を得、宝永三年（1706）七十三歳を以て死去してゐる。律師の生れたのは後西天皇の明暦二年（1656）であるが、月日は不明、十二歳にして父を失ひ、十九歳の時姉を喪つた。師の幼少年期に関しては全く何の記録もなく、入寺の時期も詳かでないが、延宝二年（1674）或は三年に、出家得度したものと推定され（註）、その頃法金剛院円巖玉周和上に依止してゐる。

（註）記録に依れば「貞享四年俗三十二、戒十四」とあるから、延宝二年受戒している訳であるが、又別に「享保十九年（1734）俗七十九、僧六十」ともあるので延宝三年の受戒となる。

和上は仮名を正桂或は照溪と言ひ、（唐）招提寺第六十三世、泉涌寺第八十五世の長老、その伝歴に関しては『千載伝』に譲る。延宝三年（1675）は師既に二十歳であり、それ以前の学業に就いて知り得るものはないが、漢詩文に興味を有つてゐた事を示す資料がある（註）。

（註）『諸方述作集』と題する雜記帳が残つてゐる。諸種の漢詩等を書き留めたもの。この中に延宝二、三

年の文字が見られる。(法金剛院蔵)

当時の風習として、その頃までに大体詩文の外四書五経、古文等は学んでゐた事と思はれる。延宝三年、因明三十三過本作法」を雲龍院で写して居り、年月を記す書写本としてはこれが現存中の最初のものである。雲龍院は泉涌寺の塔頭であり、如周和上の中興するところ、如周は法金剛院照珍を戒学の師とし、照珍の資照嶽を教へ且つ又照嶽の弟子にして慧晃の師たる玉周をも導いてゐる關係上、法金剛院と雲龍院とは特に密接な間柄であり、慧晃は出家当初常に泉山に出入して、『古迹』『宗要』『六物』『教誡』等の宗典を修めた事と思はれる。又唐招提寺は泉涌寺と共に、法金剛院先住が代々長老職を務めて居り、其の様な事情で又此処にも出入し、南都諸大寺に学習の機会を持つた事が想像せられる。『三十三過本作法纂解』の序文に、「嘗走南北之学肆」とある如く延宝・天和の約十年間は、招提・法金・泉涌を足場として南北の学林を歴訪し、因明は勿論華嚴・起信・俱舍・三論・禪・密・戒等殆どすべての学問に精勵した事であらう。而して此の間最も力を注いだものは、俱舍と因明とであり、延宝五年(1677)『俱舍論頌疏科』一卷を撰し、貞享元年(1684)には『三十三過本作法纂解』三卷を著作し且つ出版してゐる。前者は実に師二十二歳の業績であり、後者は二十九歳にしての成果である。

受戒に就いては徵すべき記録に乏しいが、享保九年(1724)臘四十とあるを逆算すれば貞享二年(1685)三十一歳にしての登壇である。然し又享保十六年(1731)臘四十六との記もあり、之によれば貞享三年(1686)三十一歳の時の登壇となる。何れにしても之は通受であらう。延宝七年(1679)師円巖玉周より灌頂を受け、松橋流の初重印可を授かり、貞享四年(1687)に同流の二重印可、元禄二年(1689)に三重印可を受けて一流の皆伝を終

へた。元禄元年『菩薩戒洞義鈔』を校訂し、翌二年『三論玄義』を開講す、これが現存資料中の開講の最初のものである。因明に関する重要書の書写校正は絶えず続き律部密部の書写その間に介在してゐる。元禄六年(1693)『俱舍論頌疏』を開講、聴徒大凡一百人、此の年玉周より法金剛院を譲り受け、元禄九年頃から一切経重修の願を起し、約十年の日子を費して宝永二年(1705)頃満願してゐる。其の間唐招提寺の戒壇復興に際しては古儀の典拠を指示し、又『別受戒式』一卷を撰して法式を規定し、自らその規定に則つて具戒を樂受してゐる。更にその間或は『楞嚴經』を講じ、或は『起信論』を講じ、或は『仏祖三経』『円覚經』を講じ、密教事相諸典の改正を試み、講学研鑽に努めてゐるが、就中妙心寺の衆請に依つて『楞嚴』を講じた時の如き聴徒三千と言はれ、その盛大さ、想ふだに愉快である。宝永二年(1705)唐招提寺に伝法灌頂を開壇し、英谷・照秀等に松橋流を伝へ、『誦経導師法則』を製し、翌三年『伝法灌頂記』を撰して一流灌頂の準拠を明かにした。正徳二年(1712)正月二十八日、綸旨を賜つて泉涌寺住持職を継ぎ、それより種々の法会に出仕す。正徳六年『唐招提寺別受戒式』を重修再治し、同年『栴橋易土集』三十巻を完結し、享保三年(1718)『翻訳名義集并誦』一卷を撰出した。翌四年法金剛院を徒弟大千照州に譲つて後山の円融菴に退き、法金剛院に前護持院隆光を招いて報恩院流の伝法許可印信并に初、重印可を受けた。斯流の皆伝は其の後六年を経て享保九年(1724)六月六日を以て完了するが、この日は実に隆光示寂の前日である。享保六年正月(唐)招提(寺)一山の請を受けて鑑真下六十六世の長老職に就き、二月聖徳太子一千百年の遠忌に際しては一山四十口の衆徒を引いて法隆寺に梵網(経)を講讀す。尚翌七年に亘つて『念仏会法則』八巻の定本を製し、更に八年『菩薩戒通受遺疑鈔莊嚴記』一卷を著した。享保九年六

月六日、興聖禪寺伯映、將に死期の到れるを知つて法を律師に附し、同日示寂す。これ正に隆光帰寂の日でもある。此の年『三論玄義』を講じ、『楞嚴』を講じ、『首楞嚴義疏講義玄談』一卷を撰す。翌十年(1725)『請雨經法自明次第』一卷を製して法金剛院に雨を祈る。享保十一年泉涌寺開山国師の五百回忌辰に当り、大円寛の加号を奏請して御嘉納を蒙り、誦經導師を勤仕し、法会記録大冊二巻を記し留め、以て前後十五年に亘る住持職を辞退した。其の後十数年間又記録に乏しいが、享保十五年秋仁和寺孝宥大僧正に松橋流の、資徒照州に報恩院流の夫々最極重位を授け、翌年泉山に『首楞嚴』を講じ、十八年(1733)八月『兩部合行略次第』一卷を製し、十月照峰に松橋方最極重位を印可し、泉涌寺に別受を行じて照充等を進具せしめ翌十九年『律門異執儀』一卷を著す。これ窺見に及ぶ資料中最後の撰出である。越えて元文二年(1737)六月八日遂に示寂、寿八十二歳、僧夏六十三、招提・泉涌の大衆、梵網戒經の法味を薫じ、法金剛院に拈香掩土の回向を捧げたのである。

孤山雁信

赤谷明海書翰集 (一四)

原田憲雄編

★1954.2.7. 原田憲雄宛。葉書。差出し住所は奈良市五条町唐招提寺。

先日お目にかかつてから二度平安(学園)に行きましたが、里内へ了徹先生には会えませんでした。へ近藤亮雅(校長も里内先生もすでに故選(典行)氏を通じて(原田の教員志望の)話を了承しているようですが、念のため少くとも里内氏までは頼んでおこうと思ったのです。若し君が直接行く気になってくれれば、尚更結構です。特に校長の場合は君の方がはるかに効果的です。待遇の面 一、五(一万五千円)は確保しなければいけま

せん、はっきり云つていいですよ、いずれ僕も里内氏には会います、(唐招提寺)鑑真会の仏教概論(講義)は月輪(賢隆)先生が引受けてくれました、あとは仏教美術だけです、四月から開講します、奥山という法金(剛院)にいた学生が愈々東京を引払って此方に来ることとなりました、今月末頃 西の京の客引のため一座に加つて東京を巡業致します、スポンサーは奈良交通会社、帰りに長野へ廻れ(れ)ばいいなと思つています、四日朝のN・H・Kで餅談義の説明をしました、

〈当時原田が新聞社をやめ教員になろうと思つていたので赤谷君が平安学園に推薦してくれていた〉

★1954.6.18. 同宛。手紙。封筒は失つた。

お便り拝見し千美さんへ入院)の事をきいて驚きました 心配さしたら という何時もながらの兄の心遣いが やつと今頃になって知らせてくれるような事になったのでしようが、それにしても今日まで何等伺いもせず失礼して小生の勝手さも相当なもの、甚だすみません、

五月十九日に続く六月六日の法会で あわただしい日が過ぎましたが 最近 暇が出来、今週の月曜日 はじめてお茶の稽古に上洛し、杉田君から宮崎君が家業を整理する状況に至つて聞かされたことを聞き、電話で元気づけて戻りましたが 兄のところは失礼しました、

来る二十三日の夜行で東京へ行き、雑務の片づけ旁々気分の変換を計る積りですが、それまでに一度上洛しますから その節お目にかかります、多分次の月曜日になると思います 早ければ学校へ連絡します、

この前お目にかかったのは何時だったか忘れてしまいました が あれから学校のことや病人のことで身心の疲

労はげしかったことと思います。無理をしないよう、くれぐれも自重して下さい。

右とりあえずお返事まで 六月十八日 赤谷明海 原田憲雄様

へ六月二十二日、赤谷君は京都大学病院に見舞われた。七月五日夜、赤谷君や私達の見守るなかで、千美は短い生涯を終えた。

★1954.8.23.同宛。葉書。

態々御通知までいただきながら七七日の御法事にお参りが出来ず残念且つ失礼いたしました。何分什宝調査がいまだに続いておりなかなか上洛の機を得ません。あの日は何とかして参る積りでいましたところ礼堂修理の際の不手ぎわが問題化し役人との交渉に手間どりつい時間がなくなってしまうました。悪しからず御赦して下さい。今日は月曜日のこととて上洛してお目にもかかる予定でしたのにこれ又不能、とりあえず一筆したためました、いづれそのうちに拝趨いたします。二十三日夜

★1954.12.9.同宛。葉書。

杉田君に托された桃栗集へ原田千美遺歌集・特製本へ頂戴しました。見なれた千美さんの着物や君の書いた箱の背文字等得難い記念品です。末はどうなるかしれませんが、小生の生きている間大事にさしていただきませう。すでに亡い人の想い出の中で、あれこれと自分をかなしませている君だろうと想像していますが、亡う人さえない孤独の中で、しかもいつまでも信念らしいもの諦念らしいものも得られずにあせっている自分の姿と想い合し、一体どちらがどうなのだろうと判断に迷っています。何にしてもこの世に生きることのむづかしさは確かなよう

ですが 何とかして早く足を地面につけたいものと願いだけは殊勝です。そのうちゆっくり会いましょう。

★1954. 12. 17. 同宛。手紙。墨書。

今日は春日若宮のおん祭、昔岡本さん等と夜の舞楽はみた事があるのですが 行列はまだだったので行ってみました 時代祭のケンランさには比すべくもありませんがヤボッタイところに親しみがありました 特に 山中から繰り出した見物人の中にもまれる味も格別だなと知ったのが何よりの収穫でした

帰りに古梅園に寄り はじめて五ツ丸の墨を買いました 磨ってみると何か書きたくなくなって蔵ってあった紙をとり出して書きはじめたのがこれです

御手紙によると 小生の不用意に洩した言葉が君を煩わしたようで恐縮です 自分の友情論ときいても 妙心寺北門の亀屋がフト浮んできただけで 論旨が想い出せない程 呆けてしまいました 呆けていないのは 皮相的な意味の自愛の念ぐらいのものでしょうか 兎に角 招山へ唐招提寺へ来てから 心のゆるみがひどくなったようです

この三月で京都を離れてから丸三年になり、横浜から法兄が移って来てくれており ところで生活の一転機を作ってもいいでしょう どうせ一生フラフラの事とて転機もへちまもないと云えるのですが このままでは底なしの沼に沈没するばかりです 分相応の荷を背負い大衆の中に紛れ込みたいと思っています

いずれお目にかかって申しのべる時もあるかと存じます 正月三日間は外へ出ませんので お暇があればお越し下さい 十二月十七日 赤谷明海 憲雄大兄御座下

★1955.1.25.同宛。手紙。封筒のみ墨書。

その後お変わりありませんか、御無沙汰のこと心にかかりながら正月以来御茶にも一度しか出なかった程度に上洛の機会が少く、欠礼をつづけています、明二十六日の晩ループル展を見に行きますが、地藏院に用事があつて今度もだめです。その次の上洛は来月になるでしょう。兄に相談したい事もあるので来月には是非お邪魔したいと思ひます、

身体の方は特別に悪いことはありませんが、相変わらず不眠に悩んでいます、運動不足、喫煙、精神不安定等が災いしているのだらうと思ひながら、積極的にその克服策を立てることもなく毎日過ごしています、寺の方は去る十五日に客殿の上棟式を挙げ、嘗ての法兄も移ってきており、割合順調に進んでいます、できるだけ自分の時間を造ろうとする願ひが、比較的叶えられる態勢になってきました、戒律の勉強よりも現在の環境からのがれたい誘惑の方が一層強くなつてきています、特にこの三月で移住以来満三年という劃期が、数え年四十というまゝで他人の年令のような年を迎えたという点と作用しあつて、愈々謀反心をかり立ててきます

まあこんなつまらぬ話についても直接耳に入れたいと思ひます、自分のことばかり書き立てましたが、いづれ拜眉の上、母上の御氣嫌もお伺ひし、兄の近況もきかしていただくことといたします。一月二十五日晚 明海

原田憲雄兄御座下

※前号正誤

一頁一行 妙得寺↓妙徳寺 三頁四行 ※に行と学↓茲に行と学 九頁一一行 危※して↓

危懼して 二〇頁七行 言まわし↓言いまわし 同頁八行 死でいた↓死んでいた (原田昌雄氏示教)

今朝(1987.7.16.)京都新聞をみていたら「富士正晴氏を悼む」という大きな見出しにぶつかった。びっくりした。天野忠氏の文章だが、何時、どうして亡くなったのかは、書いてない。それから十頁ほどあとに「関西文壇の長老 富士正晴氏死去」の記事があり「十五日午前七時、急性心不全のため大阪府茨木市安威二ノ八ノ四の自宅で死去した。七十三歳。葬儀は故人の遺志で行われぬ」とあり。略歴、作品の紹介と、桑原武夫、瀬戸内寂聴両氏の談話がのっている。この四月、祇園石段下の俵屋画廊で画展があったとき、久し振りに元氣な話をきいた。病床につくこともなく、忽然と亡くなったのであろう。いかにも富士さんらしいという気がする。葬式をしないというのも、平生の言葉どおりである。

一九四〇年、赤谷明海君に教えられ、初めて名と作品に接し、一九六〇年、杉本秀太郎氏に誘われ宅を訪問した。以来二十七年、富士さんにはずいぶんお世話になり、恵投の著書は三十冊にちかい。そのたびに札状は書いたはずだが、控えの残っているのは僅かである。それを次に記して哀悼の言葉に代える。なお、富士さんについてのわたしの文章で既に印刷されたものは、『歴史と人物』(1974.6.)に匿名で出た「ぶろふいーる」『方向』一六(1975.9.)の「富士正晴初期詩篇覚書」、『富士正晴詩集 1932-1978』(1979.12.) 附録に載った「富士正晴全詩集」の三篇だと記憶する。

『図書』一月号の「わが読書・わが反訳」を拜見しました。なるほど、なるほど、と思いながら一気にしまいまで読みました。陶淵明の晩年が長過ぎた感じがしないこと。わたしも何となく感じながら、富士さんに言われるまで、はつきり意識しませんでした。他の人については知りませんが、陶先生の場合は、その生命の振幅が作品の世界よりもはるかに広いせいではないでしょうか。かれが「不甚求解」といったのも、生命の振幅が作品より広い人の作品を読むのが好きだったんだらうというような感じがします。解を求めなかったのではなく。

『中国の隠者——乱世と知識人——』

1973. 10. 27.

お贈りくださいました『中国の隠者』を昨日落掌いたしました。あつくお礼申し上げます。今日一読しりました。カットは富士さんの筆のようですね。どれも面白いが、顔回の章のカットの顔が実にクセモノです。陶淵明が富士さんの筆でないところ、なかなかくせものです。

〈第一章〉アジカの老人のところ、「いくら論じても、儒者の方の理屈負けといった気がする。品位の点でもわるい。喧嘩すぎたのぼうちぎれの感がある。間がある。——というところ、まったくだと思いました。品位ということばがここに出て来たのでアッケにとられて感心しましたが、喧嘩すぎて式のことわざが思いがけぬところにピシヤリと出てくるので、これもいつもアッケにとられます。学者先生はおおむねこういう式の放れわざをやらないので、その先生方の文章を読んでいるとおさら感心するのかもしれないと思いますが、やってみてもうまくゆかないのだから、やっぱりこれはふだんミガキをかけて身のまわりにころがしている富士さんでないときんことでしょうか。対話から一方のことばを抜き出しても面白くならんところの消息を『論語』について書いてあ

るところ（一九頁）なるほど思いました。語録や格言集のつまらなさはそこから出てくるのでしよう。

『後漢書』逸民伝についての記事中、「『中国の隠者』などという新書は、出来ることなら、この范曄を呼び返して書かせたいようなものである。…やはり生きてゐるわたしが非力無学ながら、これをあいつとめるより仕方がない」というところ絶妙でした。富士さんが非力無学と言いつゝにはいつもひいやりしたバクダンが仕掛けてあるようです。同じ伝の贊の「さようなら」は活字になってみるといよいよ奇です。あれは文底秘沈です。

この本全体でいちばん楽しそうな（富士さんにとって）ところは陶淵明ですが、いちばん面白いところ（私にとって）は竹林七賢の章でした。魯迅の講演の注釈と来ると開いた口をふさぐひまもなく一三九頁の「落し物」などはそのままノシをつけて速達で送りつけたい人達の顔が目の前に浮かぶほどでした。もっともそういうことをいう私はまるで河内山ソーシユンがシリをまくって退場する花道を見て自分がソーシユンになった気でコーフンしてるかぶりつきみたいです。富士さんはソーシユンではなくて、いつでも教室のうしろの方でノートもとらずにやにやしている学生みたいところがあって、あの講演の席に富士さんがいたとすると魯迅はどんな顔をしたか。そんなことをうろろうろ考えながらページをめくっていると一冊がおしまいになりました。

石清―鄭板橋をぜひ近いうちに書いてください。

「律儀者勝重」

1975.1.20.

妻なる者が買ってきて読ませてくれました。妻なる者が大いに感心しておりました。私もたいへん感心いたしました。感心はいたしました。ああいうおっさんは恐ろしいですね。こわいですね。遠くから眺めて感心して

いることにいたします。もつともあのおっさんはわれわれごとき下賤の者には目もくれないだろうとはおもいますが。お身お大切に。

『高 浜 虚 子』

1978. 10. 17.

『高浜虚子』を頂きましてありがとうございます。読みはじめたらおもしろくて、今朝、読みました。虚子もおもしろいけれど、虚子を見ている、また見てゆく富士大人の目の動きや、心の動きみたいなものが生きいきと楽しく、また大いに冷やりとおもしろかったです。

42-43 頁の「荘」と「庄」は、音も意味も同じで昔の人は通じて使ったようです。いまの大陸中国では「荘」を「庄」の一本やりにして「莊子」を「庄子」と書きます。わたしはそいつがきらいですが、人に書くなどもないので、読むときには呑み込むことにしています。

「堀和」（はが）という苗字は、丹波亀山（今の亀岡）の万延元年前後の側用人のにあり、亀山藩主は松山の藩主と同姓の松平ですから、その家来には堀和というのがかなりあり、あるいは虚子の親戚にでもいて、小説に使ったのでしょうか。池内莊四郎の剣術試業でまわった藩も松平や奥平など、大名としては親戚筋が多いような感じもします。

電話をかけたら久し振りに奥さんのお元気そうな声が聞こえてきて愉快爽快でした。富士さんが不在というのもめずらしく、これも珍重でした。そのおかげでこれまた久し振りに下手くそな手紙を書く破目に陥りました。

『極 楽 人 ノ ー ト』

1979. 7. 15.

『極楽人ノート』を頂きました。有難うございます。八割ほどは読んだ記憶がありますが、あとははじめてのようです。発表される時々には追い掛けてもなかなか捕まらぬほど富士大人の遊行範囲が広いので、こうしてまとめて読ませてもらえるのは嬉しいことです。

「魯迅をいうこと」は「ユリイカ」で読んだときも感じたことですが、重たい文章、だと思いました。よく読み込んでいるが魯迅について言ったり書いたりしないある知人が、この文章を「読みました」と、ひとこと言ったことがあります。

『竹林翁醉筆 せい て は なら ん』 1982.9.13.

『竹林翁醉筆 せい て は なら ん』をいただき、今日の午後の三時間を楽しくおかしく過ごさせていただきました。題簽の「せい て は なら ん」がなかなかよい字で、ほればれと三十分。なかの文章が二時間半でした。

ここ一年ほど若い頃の自分と付き合っとうんざりしているところですが、老人になった自分もけっこういやらしいから、まだうんざりしているのがましなのかもしれません。

ほんのちよっぴりしか出てこないが、富士さんの奥さんは、じつによいおよめさんだったのですね。人の奥さんをうらやんでも仕方がないのですが。

何をするのもうっとしいが、何もせぬとよけいうっとしいので、まあ何やかやとやっています。陶侃の石運びも、あんがいそんなことだったかも知れないなあ、と思います。陶淵明でも、酒も飲めず、詩も作っていない時間には、ぶつぶつ呟きながら縄でも編んでいたんでしょか。では又。

「大 虐 殺」

1982. 11. 29.

おわかりありませんか。この間、雑誌で「大虐殺」？というのとメグレ（警部）について書かれた文章を拝見。大虐殺、まったくそうだなあ、とおもいました。同じような感想をもっても、ああいうふうには書けんあ、と全く脱帽です。

『一 休 骸 骨』

1984. 7. 28.

『一休骸骨』ありがとうございます。実にたのしい骸骨で、この絵をかいたニセ一休も、たのしみながら描いたのだらうと思いました。

（柳田）聖山氏との対談、これもずいぶん楽しみながらの対談で、（同席の）聖山夫人、どんなお顔で聞いていたのかと思うと、くすぐったくなります。

七 夕 祭 り

1987. 7. 7.

原 田 慶

空がせまくて、北斗七星の柄の先の星が三つだけ、隣家の屋根の上にみえて、柵の部分は家の向うにある。めずらしく晴れた七夕なので外に出てみたが、薄雲がかかって、星は数えるほどしか見えなかった。雲は全体に動いているらしくて、月が明るく輝いたかと思うとまた暗くなる。

ささのはさらさらとどこかで女の子がうたい出した。今日は幼稚園で七夕祭りがあったのだらう。小さな笹の

枝に短冊などの飾りをつけたのを持って、幼稚園のバスから降りてくる子どもを見た。

星は見えなくても、子どもの歌声を聞いていると、七夕らしい気がする。私の子どもの頃見た夜の空は端の方までずっと見渡すことができ、星の触れ合う音が聞こえて来そうなほどの、満天の星だった。南北に横たわる銀河、じつと見上げていると、そのまま空がずんずん降りてくるように感じた。あんなにたくさんの星は、どこに隠れてしまったのだろうか。じつと目を凝らしてみると、雲の流れの中で、ふと見えた星が消えて、他の異なつた所に別の星が光っている。

「おほしさまきいらきら、きんぎんすなご」丸味のあるよく透る声で、なんとただしく歌っているのだろう。小学校を国民学校といった頃、修身の時間には校長先生が来て下さった。修身の教科書は大変丁寧な言葉で書かれていた。

わたくしは、かず子さんのお家へあそびに行きました。おざしきで遊んでいると、裏の方で山から引いた水が滝になって落ちる音が聞こえていました。しばらくすると隣の部屋で寝やすんでおられたおばあさんが、「かず子さん、あれは何の音ですか。」とおたずねになりました。かずさんはおばあさんの所へ行つて、「おばあさん、あれは滝の音ですよ。」とおたずねになりました。それからしばらくするとおばあさんは、「かず子さん、あれは何の音ですか。」とおたずねになりました。かずさんはおばあさんの所へ行つて、「おばあさん、あれは滝の音ですよ。」とおたずねされました。何度も同じことをおっしゃるので、わたくしは不思議に思つてたずねました。するとかずさんは、「おばあさんは、ずいぶんお年をとつていらつしやるので、すぐ忘れておしまいになるの

です。」と言われました。わたくしはかず子さんがおとしよりを大切にされる気持に感心しました。

これは修身の教科書のとおりではないかもしれない、どんな字で書いてあったのか、かず子さんだったかあき子さんだったかも、憶えていない。二年生だったと思うけれど、校長先生が読み終わられて、滝の音が聞こえてきそうなほど、教室の中はしいんとしていた。

七夕とは何のかかわりもないことを、女の子の歌声が私に思い出させてくれた。

家に入って星座板をまわしてみた、琴座のベガとわし座のアルタイル、ベガは織女星、アルタイルは牽牛星、この二つの星の間の距離は十六光年もあって、七夕の夜に逢って戻るといふようなことはないのだそうである。

子ども達は伝説に従って、一年に一度だけ天の川を渡って二つの星が出あうのだと聞かされている。だから雨が降らないで二人を逢わせてあげたいと、てるてる坊主を作る。それにもかかわらず七夕の夜は雨やくもりのことが多いのではないだろうか。

北野天満宮の、天棚機姫神をまつる七夕祭は、西陣では古くから親しまれていて、明治の頃から子ども達の歌や踊りが奉納されてきたという。

私はついに七夕の星を見つけることはできなかつたけれど、昨年、ハレー彗星を見るために、天体望遠鏡を買ってもらった小さな天文学者達は、牽牛星と織女星を見つけることができたのだろうか。

仏教の經典の趣旨は題名を考えれば分かる、といわれる。『法華經』の梵名は、Saddharmapundarīka-sūtramで、saddharma は sat(正しい、妙なる) dharma(法)であり、pundarīka は白い蓮の花、sūtra は経だから、ダルマラクシャ(竺法護)が「正法華經」、クマールージーヴァが「妙法蓮華經」と訳したのは、繁簡の差はあっても原義は把らえ、「正」と「妙」とに価値の差をつける説が後に出るが、その無意味であること、今ではひろく知られている。ただ、漢字としての「妙」は、正を含んで正より広く深く、訳語としては「正」より妙だ。

正法、あるいは妙法である saddharma は、仏教では buddhadharma すなわち「仏の法」をさす。「仏の法」は『華嚴經』の古層といわれる『十地經』では、①悟りの内容としての法②悟りの内容としての法へ導くための教えとしての法③実践すべき教誡としての法、の三つに分析して説き、ヴァスバンドゥ(世親)の「十地經論」では、①証法たる(声聞、縁覚、仏)三種の菩提②教法たる經③修行法たる資糧、と整理し、『法華經』の場合も①証法②教法③修法の三面を具えたものであることを、伊藤瑞叡「華嚴思想と法華思想」(研究8)にいう。

「蓮華」と訳される仏典の語は、梵文では padma と pundarīka が代表的で、padma は蓮一般をさし、色は赤。白二種あるが、pundarīka は白のもののみを指す。本田義英『法華經論』の第一章は、pundarīka のインド文化における用法を分析しながら『法華經』の本質に迫る雄篇である。要旨を紹介しながら話を進めよう。

インドでは「泥池に生ずるもの」という複合名詞がただちに蓮の花を意味することで知られるように、泥池に生じながら泥に染まらない清浄さを讚美し、「黒」が邪・悪・雜を現わすのに対し、「白」は正・善・純等を象徴し、白い蓮の花は、古来、蓮華の王として、仙境莊嚴の相として、憧れの対象となっていた。

「白蓮華あり、靈魂を有し、三徳これを覆う、その中に幻靈あり、靈魂を有す、これ正に梵知者の知るべきところ」とはアタルヴァ・ヴェーダの句。梵とは Brahman で、宇宙の根源的原理をさし、梵知者とはその原理の探求者。ここでは白い蓮の花は人間の身体中の精神活動の機関とみられ、その機関とは、チャーンドーギヤ・ウパニシャッドが「今、ここなるこの梵の部に存するものは、白蓮華なる小さき住所なり、その内部に小さき虚空あり、又その内部に存するものを人は求むべきなり」といい、求むべきものは「実に、この（宇宙的）虚空の広さの如く、それと同じく、この心臓の内部における虚空の広さも然り、天地の兩者その内部にこそ包括せられ、火風も、日月も、電光星宿も、一切のものすべてその中に包括せらる」というところからすれば、梵の所在が宇宙的虚空であるように、梵に即する *梵即* すなわち我の所在は、心臓の内部虚空ということになり、白い蓮の花は心臓を喩えていることになろう。

蓮の花が心臓に喩えられるのは、形が似ていることにもよるが、とくに白い蓮の花を当てるのは、汚泥に染まらない清浄性と、宇宙に対応するミクロコスモスとしての神秘性によるのであろう。

これらの考え方を踏まえつつ、仏典は、白い蓮の花を人格化する。

『法華経』と連絡するといわれる『悲華経』では、五濁悪世の衆生を救う誓いをたてた人を「白い蓮の花のような大悲のボサツ」とたたえ、このボサツが生まれ変わってシャバ世界の釈迦如来となったのだ、という。

『華嚴経』では、金剛蔵ボサツを「人中の蓮華」（六十華嚴、十地品）とたたえ、異本（八十華嚴）では「人中の蓮華で執着するものが無い」といい、『大宝積経』では「蓮の花が水中に生じても水は花にこべりつかない

がボサツと世間の関係も同じ」(普明菩薩会)といい、また『優婆塞戒經』に、ボサツに二種あり、出家のボサツをビク(比丘)、在家のボサツをウパーサカ(優婆塞)といい、ビクが出家戒をたもつのは難かしくないが、ウパーサカが在家戒をたもつのは難かしい。在家の人は悪因縁の纏わることが多いからと解説し、「ウパーサカの中のプンダリーカ、ウパーサカの中の清淨の蓮華」(撰取品)と讀める。

これらによって、白い蓮の花は、泥沼のような世間から離れず、しかも泥に汚れないで衆生の救済に励む、大悲のボサツ行の実践者、の喩えであることが推察される。

さて、『法華經』の「白い蓮の花」pundarika は、旧説では「妙法」saddharma の形容詞として「最勝」という意に解されたが、そうではなく、ボサツ行の実践を意味し、「妙法蓮華」saddharmapundarika とは妙法の蓮華化、妙法を行すること蓮華のごとくあれという意味である。従って「妙法蓮華經」saddharmapundarika - sutram とは「妙法のボサツ行的实践者への教説勸誡」という意でなければならぬ。

以上が本田説の概要である。その妙法が「仏の法」であり、証法・教法・修法であるのだから、旧説のように「蓮華」を「妙法」の喩辞とみても、この經の实践的勸誡である意義は失なわれることはないが、教えられて悟り、悟ればその悟りへの道筋を人にも教え、そこへ到る努力を人と共に実践することが仏法であり、『法華經』にもそれが目指されているとするならば、本田説は、旧説よりもはるかに『法華經』の本質を言い当てていることになる。それは、しかし、今きめつけることは出来ない。読むに従って明らかになってくるだろう。

余談ながら、わたしの学んだ中学校に秋山蓮三という美しい名前の先生がおられた。五十前後だったはずだが

白髪で、やや気難しく、生徒はオジヤンと呼んでけぶたがった。しかし博學で、熱心であつたから、わたしのよ
うな出来のよくない生徒でも心の底では尊敬していたらしい。理科教室の動物・植物・鉱物の標本はきちんと整
理され手入れされていた。校門の前の銀杏並木から、校内の一木一草にいたるまで和名・学名を入れたラベルが
つけてあつた。それがどれほど大変な仕事であるかは、そのころのわたしには分らなかつたが、先生の指導する
理科クラブの生徒のひとりが巨椋池でムジナモを見つけ、新聞に報道されたこともあつた。

巨椋といえは蓮で知られた池で、花の咲くころには、理科クラブの連中は先生に連れられて夜明けがたの觀察
にも出掛けることがあつたらしい。わたしは寺の仕事があるので、どの部にもクラブにもはいつたことがない。
だが、この觀察合宿だけはうらやましくてならなかつた。合宿にはゆけなくても、巨椋池を見る機会は多く、蓮
の葉が池一面を覆い、無数の花が微風にそよいでいるさまは、夜の夢にまぎれ込んで来ることがないでもない。

『法華經』を読むと、ボサツ行というようなことよりも、巨椋池の蓮がまず思われ、ムジナモや秋山先生のこ
とが連想されるというのは、法華知らずも甚だしい。それは今に始まつたことではないが、秋山先生に習いだし
た時には既に得度し毎日『法華經』を唱えていて、ほとんど理解できないながら、『法華經』をまもつてゆかね
ばならぬ者のきつさのようなものには漠然と感ぜられ、自分にそれが耐えられそうには思えず、初めから絶望した
ようなふうであつたのに、『法華經』を唱えることをやめてしまわなかつたのは、風にそよぐ蓮の花や、質素な
木造ながら、ゆたかな草木に囲まれたあの中学での日々が、わたしを慰め励ましてくれたからだろうか。その池
も、学校も、とつくになくなって、もはや見ることはできないが。